

平成 30 年 4 月 15 日現在

機関番号：34415

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380859

研究課題名(和文) 青年期の愛着不安と自己愛傾向が不適応な状態や行動を生起させるプロセスに関する研究

研究課題名(英文) The Studies on the process that anxiety and narcissism cause maladaptive states and behaviors

研究代表者

金政 祐司 (Kanemasa, Yuji)

追手門学院大学・心理学部・教授

研究者番号：70388594

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：研究1と2では、愛着不安と自己愛傾向が周囲の他者あるいはパートナーからの被受容感を媒介して攻撃性ならびに抑うつ傾向に影響を及ぼすという仮説モデルについての検討を行った。それらの結果、愛着不安と自己愛傾向は共に、一般他者もしくはパートナーへの攻撃性を高めること、さらに、それらの攻撃性への影響は、周囲の他者やパートナーからの被受容感によって媒介されることが示された。研究3の目的は、親密な関係破綻後のストーカー的行為の加害リスク要因を明らかにすることであった。分析の結果、男女共通で、愛着不安と過去の交際時の唯一性が、関係破綻後の独善的執着を高めることでストーカー的行為を増大させることが示された。

研究成果の概要(英文)：Study1 and 2 was conducted to examine the hypothetical models that both attachment anxiety and narcissism affect depression and aggression toward other people and partners through senses of acceptance by other people and partners. The results showed that both attachment anxiety and narcissism increased aggression toward other people and partners, and these effects toward aggression were mediated by senses of acceptance by other people and partners. Study 3 aimed to reveal the risk factors for a person to perpetrate stalking-like behaviors following the end of a romantic relationship. The results revealed that both attachment anxiety and feelings that a partner was his/her "one and only" increased egoistic preoccupations after a breakup, and the egoistic preoccupations predicted the perpetration of stalking-like behaviors in both males and females.

研究分野：心理学・社会心理学

キーワード：愛着不安 自己愛 被受容感 被拒絶感 攻撃性 抑うつ ストーカー的行為

1. 研究開始当初の背景

青年・成人期の愛着不安と自己愛傾向は、前者が、自分自身に対する自信や確信のなさ、相手から見捨てられることに対する過度の不安感と焦燥感といった特徴から理解されるものであり(Mikulincer & Shaver, 2007)、後者が、自己への関心の集中ならびに自身に対する肯定的感覚とそれを維持しようとする欲求(小塩, 1998)により特徴づけられるものであるとされる。それゆえ、それらは概念的に対極的に位置づけられるものであり、実際、経験的データ上でも、基本的に、愛着不安は自尊心とは負の関連を(Mikulincer & Shaver, 2007)、自己愛傾向(主に誇大性)は自尊心とは正の関連を示すこと(小塩, 1997; Rhodewalt *et al.*, 1998)がこれまでの研究において報告されている。しかしながら、青年・成人期の愛着不安と自己愛傾向は、双方が共に不適応状態や不適応行動との関連で議論されるという共通項を有しており、また、実際にそれらを示す研究報告も多数存在する。

愛着不安の高さは、自己や他者からの評価の低さ(Bartholomew & Horowitz, 1991; 金政, 2007a)、精神的健康状態の悪さ(金政・大坊, 2003)やストレス処理の困難さ(Mikulincer & Florian, 1998)と関連することが、これまでの研究において報告されている。また、金政(2010)は、本研究の対象となる攻撃性ならびに他者軽視(もしくは仮想的有能感)といった不適応性と愛着不安との関連について検討を加えており、その結果、愛着不安は、攻撃性や他者軽視と有意な正の関連を示すこと、それらの有意な関連は、自己目的化(金政, 2012a)の下位尺度、自己希薄化(自分が誰からも必要とされていない、他者は自分のことを理解してくれていないという焦燥感)によって媒介されることを報告している。加えて、愛着不安は、親の養育態度の認知(金政, 2007b)や自己開示(Mikulincer & Nachshon, 1991)とも関連することが知られているが、この親の養育態度の認知や自己開示は、青年期の薬物使用(たばこや酒等も含む)や非行行動(万引きやけんか等)に対して影響を及ぼすという報告もあり(Soenens *et al.*, 2006)、これらの点を踏まえれば、愛着不安は、青年・成人期における問題行動に対して影響を及ぼすことが十分に想定され得る。

また、自己愛に関しても、これまで不適応な状態や行動との関連について数多くの研究が提出されてきた。小塩(2002)では、自己愛傾向と攻撃性とが有意な関連を示すこと

が報告されており、それと同様に、筆者が金政(2010)での研究とともに収集したデータ(未発表)においても、自己愛人格目録短縮版(小塩, 1998)によって測定された自己愛傾向は、攻撃性や他者軽視と有意な関連を示すという結果を得ている。また、Bushman & Baumeister (1998)は、NPI(Narcissistic Personality Inventory)によって測定された自己愛得点が高い者は、ペアを組んだ相手から批判的な反応をされた場合に、その相手に対して攻撃的な反応をすることが示されている。加えて、自己愛傾向の高さは、反社会的行動(Schoenleber *et al.*, 2011)と正の関連を示すこと、また、協調性や共感性の低さとも関連すること(Bushman *et al.*, 2003; Ehrenberg *et al.*, 1996; Marcus *et al.*, 2006)が報告されている。

これらのことを踏まえれば、愛着不安ならびに自己愛は、双方ともに不適応状態や不適応行動を増長させると考えられ、さらに、それらの関連は自我の脆弱性によって仲介されている可能性があると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、先にも述べたように、青年・成人期の愛着不安ならびに自己愛傾向が、概念的には対置されるものであるにも関わらず、それらがなぜ共に攻撃行動や他者軽視、問題行動といった不適応な状態や行動を生起させるのかについてのプロセスを、自己の不安定性と自己への関心の焦点化という観点から自我脅威状況を想定することで明らかにしようとするものである。愛着不安と自己愛傾向は、共に自己の不安定性や自己への関心の焦点化という問題を内包しており、それゆえ、愛着不安ならびに自己愛傾向が高い者は、自我が脅かされる、あるいは自己評価が低下するような状況において、防衛的に他者への攻撃性を高める、他者を否定的に評価する等が予想され、加えて、思考が近視的になることから問題行動を行いやすくなると想定され得る。

それゆえ、研究1では自我脅威の指標として、一般的な他者から受容されているかどうか(他者からの被受容感のなさは自我脅威としてとらえることができる)を、また、不適応指標として、他者に対する攻撃性を扱う。さらに、研究2では、研究1のテーマを夫婦関係に拡張し、自我脅威指標として、配偶者からの被受容感、不適応指標として、配偶者に対する間接的攻撃を扱う。次に、研究3では、恋愛関係の別れの際にイニシアティブをも

たないことが、相手からの拒絶という自我脅威の経験であると考えられることから、過去5年間の別れの際にイニシアティブをもたなかった者(相手から別れを切り出された者)を対象として、その後のストーキング行動という不適応指標の予測因に関する検討を行う。

3. 研究の方法

〔研究1〕心理学に関する講義を受講している学生を対象にして質問紙調査を実施した。質問紙の回答者は、629名であったが、質問内容を理解せずに回答したと思われる者や回答に不備のあった者を除外し、男性308名、女性272名の計580名(平均年齢19.50歳; SD=1.06)を分析の対象とした。

調査内容は、1. 一般他者版 ECR (中尾・加藤, 2004)の関係不安を測定するための項目<10項目, 7件法>、2. 自己愛傾向の測定尺度(清水・川邊・海塚, 2006)<10項目, 5件法>、3. 周囲の他者からの被受容感の測定尺度(杉山・坂本, 2006)<7項目, 5件法>、4. 一般他者に対する攻撃性の測定尺度(日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙; 安藤ら, 1999) <24項目, 5件法>であった。

〔研究2〕ウェブ調査を利用して、本人と配偶者がペアで調査に協力してくれる夫婦の参加者を求めた。調査に協力の意思を示した20代から50代の夫婦に対して調査を実施し、582組の夫婦(夫の平均年齢44.27歳; SD=8.32; 妻の平均年齢42.64歳; SD=7.84)を分析の対象とした。5)。結婚年数の平均は、13.93年(SD=9.16)であった。

調査内容は、1. 一般他者版 ECR (中尾・加藤, 2004)の関係不安を測定するための項目<10項目, 7件法>、2. 自己愛傾向の測定尺度(清水・川邊・海塚, 2006)<10項目, 5件法>、3. パートナーからの被受容感の測定尺度(杉山・坂本(2006)の被受容感尺度を改変した項目)<7項目, 5件法>、4. パートナーへの間接的暴力加害の測定尺度(相馬・具志堅・上田, 2007) <6項目, 5件法>、5. パートナーからの間接的暴力被害の測定尺度(相馬ら, 2007) <6項目, 5件法>であった。

〔研究3〕(予備調査)過去の交際時の関係性ならびに関係破綻後の思考や感情を測定するための尺度を作成するため、18歳から39歳の男女を対象に Web 調査を実施した。過去5年間に、元交際相手や元配偶者から別れを切り出されたと回答した女性189名、男性165名の合計354名(平均年齢, 25.57歳; SD=6.17)を分析の対象とした。

調査内容は、過去の交際時の関係性を測定するために作成した15項目、ならびに関係破綻後の思考や感情を測定するために作成した20項目であった。

(本調査)全国の18歳から39歳の男女に関して住民基本台帳に基づき、層化2段無作為抽出法によって6,000人を選定して郵送調査を依頼した。その結果、1,884人(有効回収率31.4%)からの回答が得られた。この1,884人中、過去5年間に交際相手・配偶者との別れを経験した者は572人おり、その中で相手から別れを切り出されたとする者、女性106人、男性110人の計216人(平均年齢, 27.12歳; SD=5.46)を分析対象とした。

調査内容は、1. 恋愛における愛着スタイル尺度の愛着不安項目(金政, 2006)<5項目, 7件法>、2. 日本語版 Dark Triad Dirty Doze の自己愛項目(田村ら, 2015) <4項目, 5件法>、3. 交際時の関係性の測定尺度—交際時における経験や相手への感情等を尋ねる項目(金政ら, 印刷中) <10項目, 5件法>、4. 関係破綻後の思考や感情の測定尺度—相手から別れを切り出された後の感情や思考について尋ねる項目(金政ら, 印刷中) <10項目, 5件法>、5. ストーカー的行為尺度—島田・伊原(2014)や島田(2016)、警視庁(2016)等のストーカー的行為を参考として作成されたストーカー的行為の頻度を測定する項目<19項目, 5件法>;ただし、分析の際は、「0= 全く行っていない、1= 行った」の2値変換を行った>。

4. 研究成果

〔研究1〕愛着不安と自己愛傾向が被受容感を媒介して抑うつ傾向ならびに一般他者に対する攻撃性に影響を及ぼすというモデルについて検討を行うことを目的に、それらに関して構造方程式モデリングによる媒介分析を行った。その結果(Figure 1)、愛着不安が高くなるほど被受容感が低くなり、さらに、被受容感が低くなることで抑うつ傾向ならびに攻撃性が高まることが示された。また、ブートストラップ法を用いて、各々の間接効果(媒介効果)について分析を行ったところ、抑うつ傾向ならびに攻撃性に関してともに有意な間接効果が認められた。

自己愛傾向については(Figure 1)、自己愛傾向が高くなるほど被受容感が高くなり、さらに、被受容感が高まることで抑うつ傾向ならびに攻撃性が低くなることが示された。また、各々の間接効果(媒介効果)の分析を行ったところ、先と同様に抑うつ傾向ならびに攻撃性の双方で有意な間接効果が認められた。

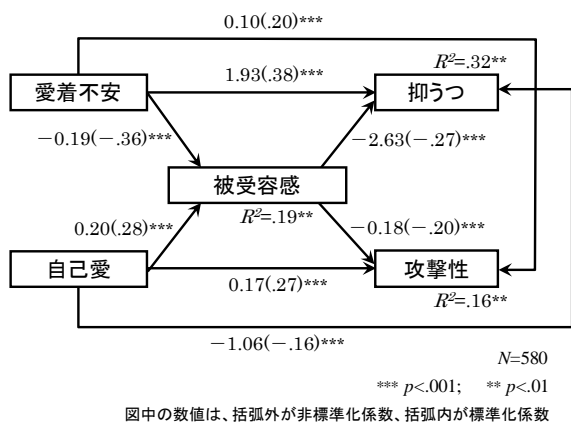


Figure 1 愛着不安と自己愛傾向が被受容感を媒介して抑うつ傾向ならびに攻撃性に及ぼす影響

つまり、愛着不安と自己愛傾向は、ともに周囲の他者からの被受容感を媒介して、不適応指標としての抑うつ傾向ならびに一般他者に対する攻撃性に影響を及ぼしていることが示された。

〔研究 2〕 愛着不安と自己愛傾向がパートナーからの被受容感を媒介して、抑うつ傾向、パートナーに対する間接的暴力加害、さらに、配偶者が報告したパートナーからの間接的暴力被害に影響を及ぼすというモデルについての検討を行う構造方程式モデリング(夫と妻に関する多母集団同時分析)による媒介分析を行った。

その結果(Figure 2)、夫と妻ともに、愛着不安が高くなると被受容感が低くなり、被受容感が低くなることで抑うつ傾向、パートナーに対する間接的暴力加害、さらに、配偶者が報告したパートナーからの間接的暴力被害が高まること示された。また、ブートストラップ法を用いて、各々の間接効果(媒介効果)についての分析を行った結果、夫と妻双方で、抑うつ傾向、パートナーに対する間接的暴力加害、配偶者が報告したパートナーからの間接的暴力被害すべて

に有意な間接効果が認められた。

また、自己愛傾向については(Figure 2)、夫婦共通で、自己愛傾向が高くなるほど被受容感が高くなり、被受容感が高まることによって抑うつ傾向、パートナーに対する間接的暴力加害、さらに、配偶者が報告したパートナーからの間接的暴力被害が低くなること示された。上記と同様に、各々の間接効果の分析を行ったところ、やはり、夫と妻の双方で、抑うつ傾向、パートナーに対する間接的暴力加害、配偶者が報告したパートナーからの間接的暴力被害すべてに有意な間接効果が認められた。

これらの結果は、夫と妻双方において、愛着不安ならびに自己愛傾向が高くなると、本人が報告した間接的暴力加害、さらに、配偶者が報告した間接的暴力被害が高まることを示すものである。また、愛着不安が高まることで、あるいは夫のみではあるが自己愛傾向が低くなることで、抑うつ傾向が高くなるという結果が示された。さらに、愛着不安ならびに自己愛傾向から抑うつ傾向、間接的暴力加害、間接的暴力被害への影響は、夫と妻双方において、パートナーからの被受容感によって媒介されていた。ただし、それらの媒介プロセスは異なっており、愛着不安が高くなると被受容感は低くなり、そのことで抑うつ傾向ならびに攻撃性は高まるが、自己愛が

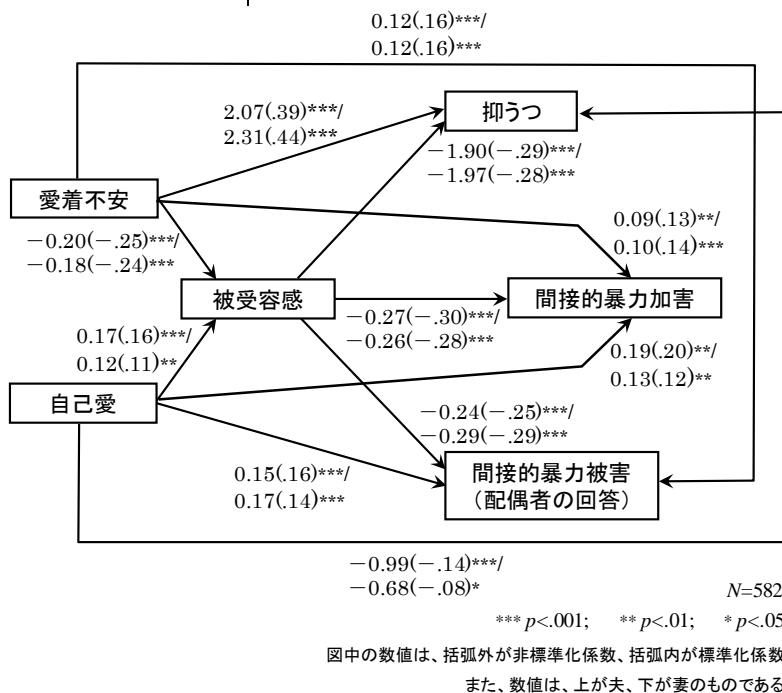


Figure 2 愛着不安と自己愛傾向が配偶者からの被受容感を媒介して間接的暴力加害、間接的暴力被害に及ぼす影響(夫婦別)

高くなると、被受容感は高まり、それによって抑うつ傾向ならびに攻撃性は抑制されるということが示された。

〔研究 3〕（予備調査）予備調査の結果から、因子分析によって、交際時の関係性を測定するための尺度は、唯一性、相手優先、甘えの受容期待の 3 因子に分類可能であることが示された。また、関係破綻後の思考や感情を測定するための尺度は、同様に、因子分析の結果、怒り・失望、反芻・拘泥思考、独善的執着の 3 因子に分類可能であることが示された。これらの尺度を用いて、本調査を実施した。

（本調査）パーソナリティ特性である愛着不安ならびに自己愛が、関係変数である過去の交際時の関係性に影響を及ぼし、さらに、それらが関係破綻後の思考や感情に対して影響することで、ストーカー的行為が増大するという仮説モデルの検討を行うため、男女別に構造方程式モデリングによる多母集団同時分析を行った。その結果、Figure 3 に示したモデルが得られた。男女の各パスに関して等値制約なしとしたモデルの適合度は、 $\chi^2(32)=30.31, p>.55, GFI=.971, AGFI=.900, RMSEA=.000$ と十分に高く、採択可能である数値を示した。ストーカー的行為に影響を及ぼす要因ならびにその過程に関して、男女で共通して認められた経路は、愛着不安が関係破綻後の思考や感情である独善的執着に

対して有意な正の影響を及ぼし、また、交際時の関係性の唯一性も独善的執着に対して有意な正の影響を及ぼすというものであった。さらに、男女共通で、その独善的執着がストーカー的行為に対して有意な正の影響を及ぼしていた。つまり、愛着不安が高くなるほど、あるいは過去の交際時に相手に対して唯一性を感じていたほど、関係破綻後に独りよがりの執着心を抱きやすくなり、そのことによってストーカー的行為が増大することが示された。

これまでの 3 つの研究結果をまとめると、まず、研究 1 ならびに研究 2 からは、愛着不安と自己愛傾向は、概念的には対置されるものであるにも関わらず、それらはともに他者への攻撃性、パートナーへの間接的暴力といった問題行動を増大させることが示された。加えて、愛着不安と自己愛傾向から他者への攻撃性ならびにパートナーへの影響は、他者やパートナーからの被受容感によって媒介されることが示された。さらに、研究 3 の結果からは、特に愛着不安は、恋愛関係破綻後の独善的執着を増大させることで、後のストーカー的行為という問題行動を増大させることが示された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

- ① 金政祐司・浅野良輔・古村健太郎（2017）. 愛着不安と自己愛傾向は適応性を阻害するのか？：周囲の他者やパートナーからの被受容感ならびに被拒絶感を媒介要因として 社会心理学研究, 33, 1-15.
- ② 金政祐司・荒井崇史・島田貴仁・石田仁・山本功（印刷中）. 親密な関係破綻後のストーカー的行為のリスク要因に関する尺度作成とその予測力 心理学研究 89 巻 2 号掲載予定

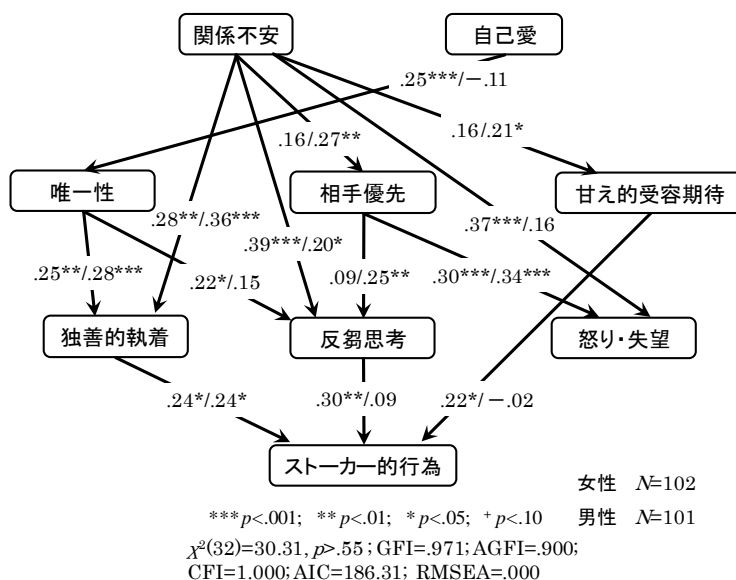


Figure 3 愛着不安と自己愛傾向が交際時の関係性、関係破綻後の思考や感情を介してストーカー的行為に及ぼす影響（男女別）

注）図の各線上の数値は、左が女性、右が男性の値である。

〔学会発表〕（計 11 件）

- ① Kanemasa, Y, Takashi Arai, Takahiro Simada, Hitoshi Ishida, Isao

- Yamamoto (2018). An exploratory study on the risk factors for perpetrating stalking-like behaviors following the breakup of a romantic relationship. The Society for Personality and Social Psychology 2018 Annual Convention. 46, Atlanta, USA.
- ② Kanemasa, Y. (2017). Do attachment anxiety and narcissism predict poor adjustment in couples? —Senses of acceptance and rejection by partners as mediators—. 12th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology. 142, Auckland, New Zealand.
- ③ 金政祐司・島田貴仁・山本 功・荒井崇史・石田 仁(2017). ストーカーについての実態調査(3) —愛着不安, 自己愛傾向, 交際時の関係性ならびに関係破綻後の思考や感情とストーカー的行為との関連— 日本心理学会第 81 回大会発表論文集, 189.
- ④ 金政祐司・浅野良輔・古村健太郎 (2017). 夫婦関係と適応(1)～愛着不安と自己愛が被受容感を媒介して抑うつ傾向ならびに攻撃性に及ぼす影響～ 日本グループ・ダイナミクス学会第 64 回大会発表論文集, 49-50.
- ⑤ 金政祐司・山本 功・荒井崇史・石田 仁・島田貴仁 (2017). ストーカーについての実態調査(4) —親密な関係破綻後のストーカー的行為の加害リスク要因に関する探索的研究— 日本社会心理学会第 58 回大会発表論文集, 76.
- ⑥ 金政祐司・荒井崇史・石田 仁・島田貴仁・山本 功 (2016). ストーカーについての実態調査(1) —ストーカー的行為の被経験率ならびにパーソナリティ特性と被害深刻度との関連— 日本社会心理学会第 57 回大会発表論文集, 136(1128).
- ⑦ 金政祐司・石田 仁・島田貴仁・山本 功・荒井崇史 (2016). ストーカーについての実態調査(2) —ストーカー行為に影響を及ぼす要因についての回顧的研究— 日本グループ・ダイナミクス学会第 63 回大会発表論文集, 71-72(S4-4).
- ⑧ Kanemasa, Y. (2015). The effects of perceptions of parenting and attachment-function on exploration and adjustment in early adults. The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology. 189, Long Beach, USA.
- ⑨ Kanemasa, Y. (2015). The effects of perceptions of parenting and attachment-function on exploration and adjustment. 11th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology. 56, Cebu city, Philippine.
- ⑩ 金政祐司 (2015). 母親の養育態度と青年期の愛着機能が探索行動ならびに適応性に及ぼす影響(2) 日本グループ・ダイナミクス学会第 62 回大会発表論文集, 116-117.
- ⑪ 金政祐司 (2015). 関係不安と誇大性自己愛が攻撃性に及ぼす影響 —周囲の他者からの受容度を媒介要因として— 日本社会心理学会第 56 回大会発表論文集, 180, 205-03.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金政祐司 (Kanemasa Yuji)

追手門学院大学・心理学部・教授

研究者番号：70388594